



TITLE:

海外發展ノ二意義

AUTHOR(S):

山本, 美越乃

CITATION:

山本, 美越乃. 海外發展ノ二意義. 經濟論叢 1917, 5(5): 615-636

ISSUE DATE:

1917-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/127294>

RIGHT:

經濟論叢

第五卷 第五號

(通卷第二十九號)

大正六年十一月發行

論

說

海外發展ノ二意義

山本美越乃

(一)

國民ノ海外發展ナル語ニハ二種ノ意義アリ、一ハ主トシテ社會政策上ノ見地ヨリセルモノニシテ他ハ經濟政策上ノ見地ヨリセルモノ是レナリ、社會政策上ノ見地ヨリセルモノハ一國ノ人口問題ニ中心ヲ置キ、經濟政策上ノ見地ヨリセルモノハ其ノ國ノ産業問題ニ重キヲ置キテ此ノ語ヲ解セントス、前者ハ通常之ヲ國民ノ移住的發展ナル語ヲ以テ表示シ、後者ハ國民ノ通商的發展ナル語ニ依リテ代表セラル、然レドモ是等ノ兩者ハ其ノ間ニ毫モ交渉ヲ有セザルモノニ非ズ、一國ノ人口ノ多少ガ其ノ國ノ産業上ノ活動ニ密接ナル關係ヲ有スルガ如ク、國民ノ移住的發展モ亦其ノ通商

的發展ニ密接ナル關係ヲ有スルコトハ之ヲ否ム可カラズ、例ヘバ國內ニ於ケル人口ノ増加ハ諸種ノ他ノ事情ト相俟チテ國民ノ移住心ヲ刺激シ、國民ノ移住ハ自ラ該地方ニ對スル通商關係ヲ進捗セシムルノ機會ヲ與フルト共ニ、又國內産業ノ發達ハ其ノ自然ノ結果トシテ對外通商ヲ旺ナラシメ、對外通商ノ發展ハ延テ國民ノ移住ヲ促スノ一因トナルコトハ各國ノ移住及通商ノ歴史ニ徴スルモ明カナリトス、然レドモ吾人ノ茲ニ論ゼントスル所ハ斯カル相互ノ關係問題ニ非ズシテ、寧ロ一國ノ社會政策上及經濟政策上ヨリ觀察セル海外發展ノ比較重要ノ度ニ關スル問題ナリトス。

從來國民ノ海外發展ノ必要ヲ主トシテ社會政策上ノ見地ヨリ高調スル論者等ハ、一般ニ近世各國ニ於ケル人口増加ノ趨勢ハ各國民ヲシテ外ニ向ヒテ發展スルノ必要ヲ生ゼシメタルモノナルコトヲ唱道ス、此ノ說ハ最後ノ結論トシテハ大體ニ於テ誤リナキガ如シト雖ドモ、然カモ尙ホ一般のニ之ヲ是認スルニ當リテハ、其ノ所謂人口増加ノ意義ニ關シテ更ニ精密ナル攷究ヲ要スベキモノアリ。

抑モ一國ノ人口増加ハ諸種ノ方面ヨリ其ノ國ノ産業上ノ活動ヲ盛ナラシメ、産業上ノ活動ノ旺盛ハ更ニ多クノ人口ヲ支持スルコトヲ得セシムルニ至ルベシト雖ドモ、國土ノ面積及其ノ富源ノ開發ニハ自ラ一定ノ限度存シ、決シテ無限ニ之ヲ増加シ得ベキモノニ非ザルガ故ニ、或程度ニ達スル時ハ國民ノ一部ハ新タニ生活ノ本據ヲ人口比較的疎ニシテ然カモ未開ノ富源ヲ有セル他ノ地

方ニ索メントシ、茲ニ海外發展ノ端緒ヲ開クニ至ルハ蓋シ自然ノ勢ト言ハザル可カラズ、故ニ人口ノ増加夫レ自體ハ必ズシモ國民ノ海外發展ノ直接ノ原因ト稱ス可カラザルモ、其ノ増加ニ伴フ産業的活動ノ能否及面積富源等ノ制限ハ、終ニ止ムナク外ニ向ヒテ發展スルノ必要ヲ感ゼシムルニ至ルモノナルヲ以テ、少クトモ人口増加ノ見込無キカ若クハ減退ノ傾向アル國民ハ對外的發展ノ資格ヲ有セズト言フハ眞ナリ、(註然レドモ此ノ理ヲ推シテ直チニ人口増加ノ傾向アル所ニ於テハ常ニ必ラズ國民ノ一部ヲ外ニ向ヒテ發展セシメ、以テ之ガ調節ヲ計ラザル可カラザルガ如クニ速斷スルハ誤レリ、何トナレバ唯漠然國內ニ於ケル人口ノ増加率ノミヲ見テ直チニ其ノ過剩ヲ速斷シ、之ガ救済ノ一手段トシテ海外發展ノ必要ヲ唱道セントスルガ如キハ、極メテ散漫且杜撰ナル提論タルニ過ギザルヲ以テナリ。

(註) "Though over-population has not been a primary motive in colonization, yet the question of population is an important one, as a stationary or retrograding people cannot reasonably expect to spare sufficient energy for colonial enterprise and to meet successfully the constant drains on 'human material' which it is sure to impose."

論者或ハ人口ノ増加ハ富ノ分配ヲ益々不平均ナラシメ、無職者・失職者・貧困者等ヲ増加セシメ、延テ社會上ニ於ケル諸種ノ病的現象ヲ誘發スルノ原因トナルヲ以テ、社會政策上ノ見地ヨリセバ之ガ救済方法トシテ海外發展ヲ獎勵スルノ必要アリトナスモ、此ノ說ハ之ヲ實際ニ適用スルニ當リテハ頗ル考慮ヲ要スベキモノアリ、蓋シ一國ニ於ケル人口ノ過剩ナリヤ否ヤノ問題ハ、單

ニ人口増加率ノ多少ノミヲ以テハ之ヲ斷ズルコト能ハズシテ、一方ニ於テハ人口ノ増加率、他方ニ於テハ是等ノ増加シタル人口ニ對シテ其ノ開發ニ委ヌベキ富源ノ有無及國內ニ於ケル産業的活動ノ餘地如何等ヲ比較考察シテ、然ル後初メテ決セラルベキ問題ニシテ、假令人口ノ増加率ハ大ナリトスルモ國內ニ於ケル産業的活動ノ餘地尙ホ少ナカラザルカ又ハ未開ノ富源ノ殘存セル場合ニハ、必ラズシモ國民ノ海外移住ヲ獎勵セザル可カラザルノ要ナキノミナラズ、若シ斯カル獎勵策ニシテ一朝其ノ當ヲ失スル時ハ、國內ニ於テ必要缺ク可カラザル有用ナル勞力ヲモ往々之ヲ國外ニ逸出セシムルガ如キ危險アリ、之ヲ過去ニ於ケル各國民ノ海外移住ノ實跡ニ徵スルモ、普通ノ事情ノ下ニ在リテハ移住者ノ大多數ハ國民ノ精華トシテ勢力ノ最モ旺盛ナル中年者ニシテ、(註)るゝめりんガ嘗テ海外ニ移住セル獨逸國民ニ就キテ調査シタル所ニ據ルモ、移住者ノ六割以上ハ十五歳乃至四十歳ノ壯年者タリ、⁽¹⁾是レ一時獨逸ニ於テモ海外移住ノ獎勵ニ對シテ有力ナル反對説ヲ生ゼシメタル所以ニシテ、獨逸國民ハ自ラ巨額ノ費用ヲ負擔シテ其ノ子弟ヲ教養シツツ、今ヤ活動ノ時期ニ入ラントスル年齢ニ達スル時ハ相率テ海外ニ移住スルガ故ニ國民ハ彼等ノ勞力ヲ利用スルヲ得ズ、其ノ結果獨逸ハ他國ノ爲メニハ極メテ有用ナル勞力ヲ提供スルモ、自國ハ産業上ニモ亦國防上ニモ是等有用ノ勞力ヲ斷エズ失フノ危險アリトノ非難ヲ生ズルニ至リシハ故ナキニ非ザルナリ。⁽²⁾

(1) G. Rümelin, "Die Bevölkerungslehre" in Schönbergs Handbuch der politischen Oekonomie, 2. Aufl., Bd. II, S. 915.

(2) R. Mayo-Smith, Emigration and Immigration, pp. 27-29.

(註) 最近一九一六年度ニ於ケル米國ヘノ移住者ニ就キテ觀察スルモ十四歳乃至四十四歳ノ市年者最モ多キヲ占ム(左表參照)
米國以外ノ他國ヘノ移住者モ亦之ニ據リテ其ノ一班ヲ推スコトヲ得ベシ。

年 齡 別	移 住 民		下 十 四 歳 以 上 者		十 四 歳 以 上 者		合 計	
	男 子 數	女 子 數	男 子 數	女 子 數	男 子 數	女 子 數	男 子 數	女 子 數
英 吉 利 人	1,237	1,237	5,681	5,681	2,183	2,183	5,681	5,681
南 部 伊 太 利 人	10,341	10,341	5,458	5,458	2,183	2,183	5,458	5,458
希 臘 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
愛 爾 蘭 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
佛 蘭 德 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
ス カ ン デ ナ ビ ア 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
墨 其 西 哥 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
希 伯 來 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
蘇 格蘭 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
葡 萄 牙 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
獨 逸 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
西 班 牙 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
日 本 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
和 蘭 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
芬 蘭 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
露 西 亞 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
支 那 人	11,237	11,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
大正四年度ニ於ケル我が移民ノ年齡ニ就キテ調査スルモ左ノ如シ。								
五 歳 未 滿	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
十 四 歳 未 滿	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
三 十 歳 未 滿	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
四 十 歳 未 滿	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
四 十 歳 以 上	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237
合 計	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237	1,237

論 說 海外發展ノ二意義

(1) Report of the Commissioner General of Immigration for 1916, U. S. A., p. 20.

(2) 外國人移住ニ關スル

此ノ如ク海外移住者ハ何レノ國ニ於テモ國民ノ精華タル壯齡者其ノ多數ヲ占ムル所以ハ、苟クモ故國ヲ去リテ異郷ニ發展セントスルガ如キ者ハ、相當ノ思慮ヲ有スルト共ニ進取的ノ氣象ニ富メル壯年者ニシテ始メテ其ノ目的ヲ達シ得ベシト雖ドモ、思慮未ダ熟セザルカ或ハ既ニ老境ニ近ヅケル者ハ斯カル元氣ニ乏シク、從テ海外發展ノ如キ大業ヲ成就スルニ缺クル所アルヲ以テナリ、然カモ此ノ特質上ノ差異ハ其ノ國ノ產業上ニモ亦同一ノ影響ヲ及ボスモノニシテ、即チ一國ノ產業的活動ノ旺否ハ少壯有爲ノ勞力ノ多少ニ依リテ決セラルト言フモ不可ナシ、彼ノローヒヤーサガ“Voluntary emigration would naturally expatriate the cream of the working classes.”ト謂クハ、必ラズシモ誇張ノ言トシテ之ヲ斥ク可カラザルモノアリ、是レ吾人ガ先キニ移住獎勵策ノ實際上ノ適用ニ關シテハ、頗ル考慮ヲ要スベキモノアルコトヲ提言シタル所以ナリトス。

(二)

更ニ又從來一般ニ行ハレツツアル過剩人口ノ調節策トシテノ海外發展論ニ關シテモ、吾人ハ其ノ眞價ヲ疑ハザルヲ得ズ、嘗テ賃金基金說(Wages Fund Theory)ノ學者間ニ勢力ヲ得タル時代ニ在リテハ、一國ノ人口ニシテ減少スルカ然ラズンバ賃金トシテ支拂ハルベキ資金ノ總額ニシテ増加セザル限リハ賃金ハ増加ノ見込ナシトノ學說ノ結果トシテ、國民ノ海外發展ヲ人口調節ノ有力ナル一手段中ニ加ヘ頗ル重要視シタルコトナキニ非ズト雖ドモ、過去一世紀間ニ於ケル各國ノ實驗ハ果シテ其ノ眞理ヲ事實上ニ立證シ得タリヤ、(註一) 論者往々國內ニ於ケル人口過剩ノ結果海外

發展ヲ企テタル一例トシテ愛蘭及獨逸ヲ舉グルモ、英國政府ガ嘗テ愛蘭人ノ海外移住ニ對シテ與ヘタル援助ハ、果シテ幾許ノ效果ヲ其ノ人口上ニ齎ラセシヤ、現今ト雖ドモ愛蘭人ハ自ラ進ンデ外ニ發展センコトニ努メツアルモ、彼等ノ生活狀態ハ之ヲ過去ニ比シテ著シキ進步ノ跡アルヲ發見スルコト能ハズ、又獨逸ニ於テモ若シ過剰人口ノ調節ヲ海外發展ノ主タル目的トセバ、何ガ故ニ海外移住者ノ多クガ人口ノ比較的疎ナルばーせん・しゆれすうゐつぐ、ほるしゆたいん・はのーばー・うゑすとぶろいせん・ほんめるん等ヨリ出デ、人口ノ比較的密ナルしゆれぢゑん・へすせんなすさう・らいんらんど・ざくせん・うゑすとふあーれん等ヨリ出ヅルコト少ナキカヲ説明スルコト能ハザルベシ。(註二)

(註一) まるほーる及うゑつぐノ調査ニ據レバ過去六十年間ニ於ケル歐洲各國ノ人口増加ノ趨勢及之ニ對スル各國ヨリノ國外移住者ノ數ハ左ノ如シ。(1)

國名	自一八三一年至同九〇年 六十年間ノ人口増加概數	平均一ケ年 ノ増加數	國名	自一八四一年至一九〇〇年 六十年間ノ移住者概數	平均一ケ年 ノ移住者數
合衆王國	10,000,000	166,666	合衆王國	5,000,000	83,333
獨逸	1,200,000	20,000	獨逸	1,000,000	16,666
歐洲露	8,000,000	133,333	歐洲露	1,000,000	16,666
伊太利	2,000,000	33,333	伊太利	1,000,000	16,666
奧太利	10,000,000	166,666	奧太利	1,000,000	16,666
西班牙	2,000,000	33,333	西班牙	1,000,000	16,666
瑞典	1,000,000	16,666	瑞典	1,000,000	16,666
葡萄牙	1,000,000	16,666	葡萄牙	1,000,000	16,666
諸威	200,000	3,333	諸威	1,000,000	16,666

論說 海外發展ノ二意義

第五卷 (第五號)

七 六二一

(1) M. G. Mulhall, The Dictionary of Statistics (4th ed.), p. 442.
A. D. Webb, The Dictionary of Statistics, p. 235.

和蘭	二〇〇,〇〇〇
丁抹	一五〇,〇〇〇
白耳	一〇〇,〇〇〇
瑞西	一〇〇,〇〇〇

和蘭	一五〇,〇〇〇
丁抹	一〇〇,〇〇〇
白耳	一〇〇,〇〇〇
瑞西	一〇〇,〇〇〇

和蘭	二〇〇,〇〇〇
丁抹	一五〇,〇〇〇
白耳	一〇〇,〇〇〇
瑞西	一〇〇,〇〇〇

和蘭	一五〇,〇〇〇
丁抹	一〇〇,〇〇〇
白耳	一〇〇,〇〇〇
瑞西	一〇〇,〇〇〇

更ニまゐるは一るハ移住ノ人口ニ及ボス影響ニ關シテ別ニ左ノ興味アル統計的調査ヲ示セリ。

(1)

國名 年 度

人口一萬ニ對スル移住ニ因シタル人口ノ増加數 減少數 差引増加數

國名 年 度

人口一萬ニ對スル移住ニ因シタル人口ノ増加數 減少數 差引増加數

合衆王國

一八七一年 一八八〇年 一八八一年 一八八五年 一八八六年 一八八七年 一八八八年 一八八九年 一八九〇年 一八九一年 一八九二年 一八九三年 一八九四年 一八九五年 一八九六年 一八九七年 一八九八年 一八九九年 一九〇〇年

一八七一年 一八八〇年 一八八一年 一八八五年 一八八六年 一八八七年 一八八八年 一八八九年 一八九〇年 一八九一年 一八九二年 一八九三年 一八九四年 一八九五年 一八九六年 一八九七年 一八九八年 一八九九年 一九〇〇年

獨逸

一八七一年 一八八〇年 一八八一年 一八八五年 一八八六年 一八八七年 一八八八年 一八八九年 一八九〇年 一八九一年 一八九二年 一八九三年 一八九四年 一八九五年 一八九六年 一八九七年 一八九八年 一八九九年 一九〇〇年

一八七一年 一八八〇年 一八八一年 一八八五年 一八八六年 一八八七年 一八八八年 一八八九年 一八九〇年 一八九一年 一八九二年 一八九三年 一八九四年 一八九五年 一八九六年 一八九七年 一八九八年 一八九九年 一九〇〇年

伊太利

一八七一年 一八八〇年 一八八一年 一八八五年 一八八六年 一八八七年 一八八八年 一八八九年 一八九〇年 一八九一年 一八九二年 一八九三年 一八九四年 一八九五年 一八九六年 一八九七年 一八九八年 一八九九年 一九〇〇年

一八七一年 一八八〇年 一八八一年 一八八五年 一八八六年 一八八七年 一八八八年 一八八九年 一八九〇年 一八九一年 一八九二年 一八九三年 一八九四年 一八九五年 一八九六年 一八九七年 一八九八年 一八九九年 一九〇〇年

奧太利

一八七一年 一八八〇年 一八八一年 一八八五年 一八八六年 一八八七年 一八八八年 一八八九年 一八九〇年 一八九一年 一八九二年 一八九三年 一八九四年 一八九五年 一八九六年 一八九七年 一八九八年 一八九九年 一九〇〇年

一八七一年 一八八〇年 一八八一年 一八八五年 一八八六年 一八八七年 一八八八年 一八八九年 一八九〇年 一八九一年 一八九二年 一八九三年 一八九四年 一八九五年 一八九六年 一八九七年 一八九八年 一八九九年 一九〇〇年

西班牙

一八七一年 一八八〇年 一八八一年 一八八五年 一八八六年 一八八七年 一八八八年 一八八九年 一八九〇年 一八九一年 一八九二年 一八九三年 一八九四年 一八九五年 一八九六年 一八九七年 一八九八年 一八九九年 一九〇〇年

一八七一年 一八八〇年 一八八一年 一八八五年 一八八六年 一八八七年 一八八八年 一八八九年 一八九〇年 一八九一年 一八九二年 一八九三年 一八九四年 一八九五年 一八九六年 一八九七年 一八九八年 一八九九年 一九〇〇年

瑞典

一八七一年 一八八〇年 一八八一年 一八八五年 一八八六年 一八八七年 一八八八年 一八八九年 一八九〇年 一八九一年 一八九二年 一八九三年 一八九四年 一八九五年 一八九六年 一八九七年 一八九八年 一八九九年 一九〇〇年

一八七一年 一八八〇年 一八八一年 一八八五年 一八八六年 一八八七年 一八八八年 一八八九年 一八九〇年 一八九一年 一八九二年 一八九三年 一八九四年 一八九五年 一八九六年 一八九七年 一八九八年 一八九九年 一九〇〇年

(註) 獨逸ニ於ケル人口ノ密度ト移住者ノ數トノ關係ヲ表示セバ左ノ如シ。

(2)

聯邦

一基米ニ付人口ノ密度 人口十萬人ニ付移住者ノ數

聯邦

一基米ニ付人口ノ密度 人口十萬人ニ付移住者ノ數

ぼーゼン

七二・四

しゅれちみん

二一・六

しゅれすうあつぐほ

八五・二

へすせんすう

一四・四

はのーばー

七六・四

らいんらん

三三・七

うゑすさぶろいせん

六六・七

ざくせん

三三・三

ぼんめるん

五〇・〇

うゑすさぶろいせん

一〇五・〇

(1) Mulhall, Dictionary of Statistics, p. 443.

(2) Statistisches Jahrbuch für das Deutsche Reich, 1915. = 據ル、

加之、假リニ海外移住ノ獎勵ニ依リテ一時人口ヲ調節シ得タリトスルモ、之ニ因リテ生ズル國
 内住民ノ生活上ノ餘裕ハ、久シカラズシテ又人口ヲ舊ニ復セシムベキハ想像スルニ難カラザルヲ
 以テ、斷エズ多數ノ國民ヲ移住セシメ得ベキ見込存ゼザル限リハ、斯カル人口ノ調節策ハ多大ノ價
 値ヲ有スルモノニ非ズ、然カモ斷エズ國民ノ移住ヲ獎勵セント欲セバ、前述ノ如ク常ニ國內ニ於
 ケル少壯有爲ノ勞力ヲ失フノ危險アルコトヲ覺悟セザル可カラズ、從來國民ノ海外發展ヲ人口調
 節ノ有力ナル一手段ト思考セル論者等ハ、移出セラルベキ勞力ノ性質及之ガ人口調節上ニ及ボス
 實際上ノ效果ヲ各種ノ方面ヨリ攻究シテ然ル後之ヲ獎勵スルニ非ズシテ、極メテ單純ナル理論上
 ノ見地ヨリ之ヲ力說セントスルニ過ギズ、是レ其ノ所說ト實際トノ間ニ著シキ差異ヲ生ズル所以
 ニシテ、めーよー、すみすが嘗テ其ノ著『移住論』中ニ "Immigration does not bring about a decrease
 of population; neither does it relieve congestion of population, nor remove the burden of poverty
 and low-living which has been caused by an excess of population." ³ト言ヘルハ寧ろ吾人ト其ノ見
 ヲ同フセルモノアリ、假令海外移住ヲ獎勵スルモ其ノ人口調節上ニ及ボス效果ハ左マデ大ナルモ
 ノニ非ザルコト以上要述セル所ノ如シトセバ、社會政策上ノ見地ヨリセル海外發展論ノ實際上ノ
 價值ノ如キモ亦推シテ知ル可キノミ、然レドモ斯ク言ヘバトテ吾人ハ決シテ國民ノ海外移住ヲ輕
 視セントスル者ニ非ズ、唯從來一般ニ妄信セラレタルガ如クニ之ヲ以テ過剰ナル一國ノ人口ヲ調

(1) Mayo-Smith, Emigration and Immigration, p. 26.

節シ、現今ノ社會ニ於ケル諸種ノ病的現象ヲ救済シ得ルガ如クニ速斷スルノ謬レルコトヲ指摘セントスルニ過ギザルナリ。

(註) 海外移住ノ獎勵ヲ以テ一國ノ人口ノ過剩ヲ調節シ得ルガ如クニ思考スルノ誤レルコトハ既ニ述ベタル所ノ如シト雖モ、唯人口多キガ爲メニ有爲ノ材ヲ抱クモ國內ニ在リテハ適當ノ業ヲ得ズシテ、徒ラニ不平不滿ノ念ヲ增長セシムルニ過ギザルガ如キ場合ニハ、此ノ如キ國民ノ海外移住ノ途ヲ開クコトハ固ヨリ吾人ノ所論ト相容レザルモノニ非ズ、何トナレバ斯カル場合ニハ直接其ノ國ニ何等ノ損害ヲ與フルコトナキノミナラズ、移住者自己ニトリテモ却テ幸福ヲ齎ラスベキガ故ニ毫モ之ヲ非難スベキ理由存セザルヲ以テナリ、然レドモ海外移住ノ獎勵ヲ以テ領土ノ膨脹主義若クハ侵略主義ノ實行ノ一段ニ供セントスルガ如キハ非ナリ、此ノ如キ政策ハ世界ノ各地ニ未ダ無主地ノ殘存セル時代ニ在リテハ兎ニ角、現今ノ如クニ各國其ノ領域ヲ劃定シテ妄リニ他國ノ權力ノ侵入ヲ許サザル時代ニ於テハ到底其ノ成功ヲ期シ得ベキニ非ザルナリ、其ノ他海外移住ノ獎勵ヲ以テ對外貿易促進ノ重大ナル一原因ノ如クニ看做シ、或ハ移住者ニ依リテ本國ニ送付セラルベキ金額ハ國富ノ增加ニ寄與スル所大ナルガ如クニ誇張スル論者ナキニ非ズト雖ドモ、吾人ハ其ノ效果ヲ全然無視スルノ誤レルト共ニ又之ヲ過大視スルノ誤レルコトヲ信ズル者也。

既ニ一言セルガ如ク假令一國ノ人口ノ増加率ハ大ナリトスルモ、國內ニ於ケル産業の活動ノ餘地尙ホ渺ナカラザルカ若クバ未開ノ富源ノ殘存セル場合ニハ、國外移住ノ獎勵ニ先ダチ國內ノ産業ヲ一層旺盛ナラシムルコトニ依リテ増加セル人口ノ收容力ヲ大ナラシムルト共ニ、又能フ限り其ノ生産物ヲ外ニ移出セシメンコトニ全力ヲ傾注スルヲ以テ寧ロ急務トナス、國內ニ於ケル産業的ノ活動及富源ノ開發ニシテ遺憾ナキ程度ニ達スル時ハ、恰モ充實セル水槽ノ自ラ外ニ溢出スル

ガ如ク、國民ノ海外移住ノ如キハ特ニ獎勵ヲ加フルコトナキモ自ラ其ノ途ヲ開クニ至ルベキヤ必セリ。

(三)

隣テ之ヲ我ガ國ノ實況ニ就キテ考フルニ、農業上ニ於テモ工業上ニ於テモ將又商業上ニ於テモ我ガ現時ノ産業狀態ハ果シテ先進諸國ニ比シテ毫モ遜色ナキ程度ニ迄進歩發展ヲ遂ゲツツアリヤ、農業ハ實ニ我ガ國民の産業トシテ二千有餘年ノ歴史ヲ有シ、一見其ノ發達ノ頂點ニ達シツアルガ如キ觀アルモ、尙ホ仔細ニ之ガ經營ノ實況ヲ考察シ來ル時ハ、土地ノ整理・種子肥料等ノ改良・農業勞力ノ有利ナル使用・金融機關ノ整備・農民ノ教育及各種ノ協同組織ノ獎勵等ニ依リテ、農業の生産ヲ現在ヨリモ更ニ増加セシムベキ餘地決シテ少ナシトセズ、凡ソ農業の生産ノ増加ハ既墾地ノ利用ヲ一層集約的ナラシムルヲ以テ第一義トナスモ、集約的ノ農業經營ニ關シテハ過小農民國タル我ガ國ノ如キハ、殆ンド遺憾ナキ程度ニ達シツツアリト謂フモ敢テ不可ナク、從來我ガ農業ヲ目シテ既ニ發達ノ頂點ニ達シタリトナス論者等ハ、單ニ此ノ點ノミニ着眼シテ其ノ將來ヲ斷ゼントスルモノノ如シト雖ドモ、農業の生産ノ増加ハ更ニ(一)現在ノ未耕地・荒蕪地又ハ水底地等ヲ化シテ農耕地ト成スコト、(二)種子ノ改良肥料ノ選擇其ノ他一般栽培技術ニ注意スルコト、(三)副業ノ獎勵及農業勞力ノ一層有利ナル使用方法ヲ講究スルコト、(四)農業金融ノ便ヲ計ルコ

トニ依リテ農民ノ生産的活動ヲ敏活ナラシムルコト、(五)學理ト經驗トヲ基礎トセル適切ナル實用的ノ農業教育ヲ農民間ニ普及セシムルコト、(六)各種ノ組合又ハ團體ヲ組織シテ斷エズ農事ノ改良及農業の生産ノ増加ニ協力セシムルコト等ニ負フ所甚ダ大ニシテ、是等ノ點ニ關シテハ我が農業ノ現状及農民ノ實況ハ未ダ頗ル幼稚ノ域ニ在リト言ハザル可カラズ、故ニ現在ノ狀態ヲ以テ我が農業ハ既ニ發達ノ眞頂ニ達シタルガ如クニ思考スルハ誤レリ。

(註) 我が國ノ農耕地ノ面積ハ大正三年度ニ於テ四二百九十六萬一千町步餘・畑二百九十一萬六千町步餘・合計五百八十七萬八千町步餘ニシテ、國土ノ總面積三千八百九十一萬七千町步餘ノ約一割五分ニ相當スルモ、尙ホ此他ニ原野即チ未耕地又ハ荒蕪地トシテ殘存セルモノ百三十二萬七千町步餘アリ、然ルニ近年是等ノ未耕地又ハ荒蕪地ノ地目ノ變換・湖海池沼等ノ埋立千拓等ノ結果トシテ農耕地ハ逐年増加シ、明治三十八年ヨリ大正三年ニ至ル十箇年間ニ就キテ觀察スルモ、田ニ於テハ平均毎年一萬三千町步餘・畑ニ於テハ四萬一千町步餘・合計五萬五千町步餘ヲ増加シツツアリ、從テ農業的ノ生産モ亦之ニ比例シテ増加シツツアルコトハ言サ候タズ。

今ヨリ殆ンド二十年前獨逸ノ農政學者ビロツハ『一國ノ農業の生産物ハ國民ノ需要ニ應ズルニ充分ナラザル可カラズ、若シ然ラザル時ハ他國ニ依賴スルノ必要ヲ生ズルニ至ルモ、此ノ如キハ大ニ慎ムベキコトタリ、假リニ獨逸ガ露・佛・英等ト戰端ヲ開クガ如キコトアリトセバ、獨逸ノ農業ノ現状ヲ以テシテハ國民ハ食料問題ノ爲メニ早晚苦シムノ日アルベキヤ必セリ、蓋シ獨逸ノ農業の生産物ハ國民ノ需要ヲ充タスニ足ラズシテ、穀類ノ約七分ノ一ハ輸入ニ仰ギツツアルヲ以テナリ、斯カル輸入ハ全ク之ヲ防廳スルカ少クトモ最少限度ニ止メザル可カラズ、而シテ此目的

(1) 大正六年農商務省農務局刊『本邦農業要覽』一乃至二頁、

ヲ達セントセバ、土地ノ利用ヲ一層集約的ナラシムルコト及現在ノ未耕地ヲ化シテ農耕地タラシムルコトニ注意スルニ在リ』ト言ヘリ、⁽¹⁾ 這ハ密ニ二十年後ノ今日ニ至リテ獨逸國民ニ痛切ニ其ノ眞理ヲ覺認セシメタルノミナラズ、嘗テ國際分業ノ主義ヲ以テ國是トナシ、農業ノ如キハ殆ンド顧ミザリシ英國ニ於テスラ、今次ノ大戰ハ明カニ國內ニ於ケル農業の生産ノ増加ヲ計ルノ必要アルコトヲ感知セシメ、農業振興策ハ今ヤ有力ナル輿論ヲ形造ラントシツツアリ、⁽²⁾

(註) 英國ニ於テハ國民ノ生活ノ主糧タル小麥及小麥粉ノミニ就キテ觀察スルモ、國內ノ產額ハ之ヲ價格ニ見積ル時ハ全消費額ノ約六分ノ一、數量上ヨリセバ約五分ノ一ニ過ぎズ、而シテ残り五分ノ四ハ之ヲ輸入ニ仰ギツツアルモ、其ノ内約二分ノ一ハ自國ノ植民地即チ印度・加奈太及澳洲等ヨリ輸入シツツアリ。⁽³⁾

幸ニシテ我が國ニ於ケル穀類ノ生産額ハ國民ノ主糧タル米麥二種ニ就キテ觀察スルモ、近年品種ノ改良・施肥ノ増加其ノ他一般栽培技術ノ進歩ニ伴ヒ產額次第ニ増加シ、最近五箇年間(自明治四十四年至大正四年)ノ平均產額ヲ過去(自明治二十四年至同三十八年五箇年間)ニ比較スル時ハ、米ハ栽培面積ニ於テハ五分ヲ増加シタルニ拘ハラズ其ノ產額ハ二割餘ヲ、又麥類ハ栽培面積ニ於テハ約四厘ヲ減ジタルモ其ノ產額ハ約二割六分ヲ増加シ、⁽⁴⁾ 此ノ如クシテ全需要額ニ對シテハ尙ホ多少ノ不足ナキニ非ザルモ然カモ辛フジテ國內ノ消費ヲ充タシ得ルノ狀態ニ在リ。(註)

(註) 自明治四十三年至大正三年五箇年間ノ我が國ノ米ノ消費額ハ平均五千三百二十七萬石餘、麥類ノ消費額ハ平均二千三百〇六萬石餘ナルモ、自明治四十四年至大正四年五箇年間ニ米ノ生産額ハ平均五千三百〇二萬石餘、麥類ノ生産額ハ平均二千

(1) F. v. Goltz, Agrarwesen und Agrarpolitik, S. 11-15.

(2) A. D. Hall, Agriculture after the War, pp. 127-131.

H. Gibson, The New Agriculture. (An article in "United Empire," May, 1917.)

R. H. Rew, Food Supplies in War Time (in Oxford Pamphlets Series X.)

(3) A. D. Hall, Agriculture after the War, p. 127.

二百九十六萬石餘ナルヲ以テ、米ノ不足額ハ一億年約二十萬石、麥類ノ不足額八十萬石内外ニ過ギズ。⁽¹⁾

更ニ米麥類ノ生産増加ノ割合ト人口増加ノ割合トヲ比較スルモ、少クトモ最近二十年間ノ傾向ハ我が國ニ於テハまるさすヲシテ其ノ名ヲ成サシメタル人口論ノ證據ヲ是認セシムルニ足ルベキ有力ナル材料ヲ發見スルコト能ハズ、否却テ之ト反對ニ人口増加率ヨリモ食料増加率ノ寧ロ大ナラントバルガ如キ傾キサヘアリ、(別表參照) 固ヨリ斯カル現象ノ將來永久ニ持續スベキ乎ハ頗ル疑問ニシテ、若シ人口ノ増加ニ對スル自然的又ハ人爲的ノ制限存セズトセバ、地積ノ有限性ノ結果トシテ終ニハ著シク食料ノ不足ヲ感ズルニ至ルノ時機ナシトセズト雖ドモ、少クトモ現今ニ於テハ未ダ斯カル傾向ヲ認メ得ベカラザルヨリ考フルモ、我が國民ノ産業的活動中最モ古キ歴史ヲ有セル農業ニ於テスラ、尙ホ其ノ發達ニ餘力ノ存スルコトヲ推知セシムルニ難カラザルナリ。⁽²⁾

(別表)

米麥ノ收穫増加率ト人口ノ増加率トノ比較

年	度	米ノ收穫高	比率	麥ノ收穫高	比率	人	口	比率
白明治二十年	五箇年	26,281,281石	100	13,020,330石	100	33,245,213	100	
至同二十四年	間平均							
白明治二十五年	同上	28,101,101	103	13,424,403	113	31,111,403	104	
至同二十九年	同上							
白明治三十年	同上	21,103,111	102	12,121,111	111	28,103,111	111	
至同三十四年	同上							
白明治三十五年	同上	21,103,111	112	12,121,111	112	28,103,111	112	
至同三十九年	同上							

(1) 大正四年農商務省農務局刊『米ニ關スル調査』日本ノ部一四一頁、
同上『麥其他雜穀ニ關スル調査』一九二頁、
(2) 農學博士古在由直氏『五十年後ノ農業』(帝國農會報第七卷第七號)參照、

自明治四十年	同上	50,430,333	111	21,818,833	112	49,946,600	113
至同四十四年	同上	50,430,333	110	21,673,333	113	51,436,200	112
大正元年	年	50,430,333	110	21,673,333	113	51,436,200	112
備考 米・麥ノ收穫高ハ農務統計ニ據リ、人口ハ統計年鑑乙種現在人口ニ據ル、比率ハ何レモ自明治二十年至同二十四年 五箇年間ノ平均チ一〇〇トシテ算出ス。							

(四)

次ニ工業ニ關シテハ更ニ其ノ發達ノ幼稚ナルモノアリ、凡ソ一國ノ工業ノ發展ヲ期セント欲セバ一方ニ於テハ最新銳利ナル器具機械ヲ使用シテ直接消費ノ用ニ供セラルベキ貨物ノ生産ニ從事スルト共ニ、他方ニ於テハ又是等ノ器具機械ヲ發明・改良・製造・工作スル等ノ設備完全ニ行ハレザル可カラズ、換言セバ消費財工業（若クハ機械使用工業）ト共ニ資本財工業（若クハ機械製作工業）ノ併行進歩ヲ期セザル可カラズ、彼ノ英・獨・米等ノ諸國ガ世界的市場ニ於テ工業上ニ雄飛シツツアル所以ハ、實ニ是等ノ兩者ノ併進ヲ圖リツツアルニ因ル、我が國ニ於テハ大規模工業ノ輸入セラレシヨリ以來日尙ホ淺キヲ以テ固ヨリ之ヲ彼レニ比スベカラズト雖ドモ、今次ノ大戰前ニ至ル迄ハ我が工業ハ所謂消費財工業ノ時代ヲ脱セズシテ、資本財工業ニ至リテハ殆ンド見ルニ足ルモノナカリシト言フモ不可ナシ、然ルニ今次ノ大戰ハ我が資本財工業ノ發達ニ一大刺激ヲ與ヘ、嘗テ三千萬圓乃至四千萬圓ノ輸入ヲナシツツアリシ各種ノ器具・機械・軌條・船舶・車輛等ノ主要ナル資本財ノミニ就キテ觀ルモ、大正四年度ニハ其ノ輸入額ヲ一千五百萬圓内外ニ減殺スルコトヲ

(1) 大正三年山崎繁次郎編『世界資料』二一八乃至二一九頁、

(1) 得タリ、然カモスカル資本財ノ輸入ノ減少ハ普通起リ得ルガ如キ國內ニ於ケル産業的活動ノ不振ノ結果ニ基クモノニ非ズシテ、却テ從來他國ニ仰ギツツアリシ資本財ノ一部ヲ今ヤ自國ニ於テ供給スルヲ得ルニ至レルガ爲メナルコトヲ思フ時ハ、我ガ工業上ノ活動ハ實ニ消費財生産ノ方面ノミナラズ、資本財生産ノ方面ニ於テモ將來開拓ノ餘地尙ホ頗ル多キヲ感ゼズンバ非ズ、唯我ガ國ハ從來英・獨・米等ノ諸國ノ如クニ資本財工業ノ發達ニ最モ必要缺ク可カラザル鐵及石炭ヲ豊カニ產出セザリシ弱點アルモ、(註) 輓近帝國領土ノ膨脹及勢力圍内ノ擴張ニ伴ヒ、朝鮮・滿洲及近ク支那内地ニ於テ是等ノ原料ヲ得ルノ途開カレツツアルヲ以テ、我ガ工業上ノ活動モ亦將來ハ單ニ消費財工業ノ方面ニノミ踰階セスシテ、更ニ進ンデ資本財工業ノ方面ニ發展センコトニ努メザルベカラズ。

(註) 一九〇八年乃至一九一〇年ノ三箇年間ニ於ケル世界ノ鐵鑛及石炭ノ平均產額ハ左ノ如シ

鐵			石		
國名	噸數	全產額ニ對スル割合	國名	噸數	全產額ニ對スル割合
米國	四、八三三	三・五	米國	四、八三三	三七・五
獨逸	三、三八八	二・五	英 國	三、二二八	二四・一
英 國	一、五二二	一・〇	獨逸	二、二〇七	一六・八
佛 國	一、〇七	八・四	佛 國	一、〇七	八・四
露 國	九、五	七・五	露 國	七、〇	五・四
班 牙	五、六	四・四	班 牙	五、六	四・四

(1) 日本帝國第三十乃至三十五統計年鑑參照、

(2) J. R. Smith, Industrial and Commercial Geography, pp. 357, 383.

其他ノ諸國

一三八

100.0

計

一三八

100.0

同年度内ニ於ケル我が國ノ鐵ノ平均年産額
ハ五萬五千噸餘ニシテ其ノ後次第ニ増加シ
大正四年度ニハ八萬二千噸餘ニ達シタリ

(第三十二次農商務統計表)

白耳義
日本
其他ノ諸國
計

一三八
一六四
六五四
一三五・七

二・一
一・五
五・四
100.0

然レドモ茲ニ注意スベキハ資本財工業ノ發達ニ關シテハ更ニ他ノ困難ノ其ノ途ニ横タハレルモ
ノアルヲ以テ、之ガ生産ヲ盛ナラシメント欲セバ須ラク此ノ困難ノ除去ニ努ムルヲ以テ急務トナ
ス。之ヲ一切ノ工業ノ發達ノ徑路ニ就キテ觀察スルニ、凡ソ如何ナル種類ノ工業ト雖ドモ其ノ發
達ノ當初ヨリ完全ナル生産品ヲ作出スルコトハ頗ル困難ニシテ、這ハ消費財ノ生産タルト資本財
ノ生産タルトヲ問ハザルナリ、然ルニ消費財ノ生産ニ於テハ最初ハ其ノ品質多少劣ル所アルモ、若
シ其ノ價格ニシテ低廉ナランカ之ヲ處分スルコト必ズシモ困難ナラズ、又國內ニ於ケル斯カル
幼稚ナル工業ヲ發達セシメンガ爲メニ他國ノ競争品ニ對シテ保護的關稅ヲ課シ、以テ國內ノ生産
者ヲ保護スルノ途無キニ非ズ、然レドモ資本財ノ場合ニ在リテハ假令其ノ價格ハ低廉ナルモ品質
ノ劣レルモノハ斷エズ修繕其ノ他ノ失費ヲ要スルコト大ナルガ故ニ、思慮アル企業者ハ價格ノ如
何ニ拘ハラズ品質ノ優良ナルモノヲ購ハントスルニ至ルハ免ル能ハザル所タリ、既ニ然リトセバ
資本財ノ場合ニハ優良ナル競争品ノ存スル時ハ、品質ノ劣レル物ハ市場ニ併立スルコト能ハザル
ノ結果ヲ生ズベシ、然カモ此ノ場合ニ國內ニ於ケル幼稚ナル資本財工業ノ發達ヲ保護センガ爲メ

ニ他國ノ優良品ニ課税スルガ如キハ、却テ是等ノ資本財ヲ使用シテ消費財ノ生産ニ從事セントスル多數ノ企業者及一般消費者ニ不利ヲ與フルモノナルガ故ニ、漫リニ斯カル方法ニ依頼スベキニ非ズ、加之、更ニ資本財ノ生産ハ消費財ノ生産ヨリモ概シテ長日月ヲ要シ、同一行爲ヲ反覆修鍊スルノ機會多カラズ、從テ生産技術上ノ熟鍊ヲ得ルコトモ亦容易ナラザルノ差アリ、是等ノ事情ハ實ニ資本財工業ノ消費財工業ヨリモ發達ヲ困難ナラシムル所ノモノタリ、故ニ之ニ對スル方策トシテハ一面ニ於テハ工業教育ノ力ニ依リテ優良ナル資本財ノ生産ニ關スル智識ノ普及ヲ計ルト共ニ、他面ニ於テハ少クトモ之ガ實驗時代ハ國家自ラ其ノ資ヲ投ジテ模範的ノ工場ヲ起シ、精巧ナル資本財ノ生産ニ缺ク可カラザル實際上ノ技術ヲ修得セシムルノ機會ヲ與フルコトニ注意セザル可カラズト信ズ。

此ノ如クシテ資本財工業ノ方面ニ一新紀元ヲ開クニ至ル時ハ、其ノ自然ノ結果トシテ消費財工業モ亦現今ヨリモ更ニ一層ノ活躍ヲ呈スルニ至ルベシ、蓋シ是等ノ兩者ハ恰モ双輪ノ如ク互ニ相依リ相輔ケテ一國ノ工業的發展ヲ完成セシムベキ特質ヲ有スルヲ以テナリ、果シテ然リトセバ之ヲ工業上ヨリ觀察スルモ、我が國民ノ將來ノ活動ノ餘地ハ尙ホ頗ル大ナリト言ハザル可カラズ。

(五)

以上要論セルガ如ク既ニ農業上ニ於テモ亦工業上ニ於テモ我が國民ノ活動ノ餘地尙ホ頗ル大ナ

リトセバ、商業上ノ活動ノ餘地ノ如キハ更ニ絮説ヲ須キズシテ自ラ明カナルベシ、蓋シ一國ノ商業ノ消長ハ其ノ國ニ於ケル農工二業ノ消長ニ依リテ左右セラレ、是等ノ二業ニシテ盛ナランカ商業モ亦自ラ活氣ヲ呈ス可キモ、然ラザル場合ニハ反對ノ現象ヲ示ス可キヲ以テナリ、故ニ我ガ商業ノ健實ナル發達ヲ期セント欲セバ先ヅ其ノ根本ニ溯リテ農工二業ノ培養ニ努メザル可カラズ、斯カル觀點ヨリセバ國內ニ工業的發展ノ要素ヲ缺クガ故ニ止ムナク農業的ノ生産ニ全力ヲ傾注シツツアル和蘭及國內ノ農業ヲ荒廢ニ歸セシムルモ尙ホ工業的ノ生産ニノミ没頭シテ顧ミザリシ過去ノ英國ノ如キハ、未ダ以テ我ガ國民ノ範トナスニ足ラザルナリ、基礎アリ根抵アル商業的ノ發展ハ必ラズヤ農工二業ノ保調的發達ニ立脚セザル可カラズ、這ハ平時ニ在リテハ比較的閑却セラレツツアル問題ナルモ、今次ノ大戰ノ如ク一朝有事ノ日ニハ痛切ニ其ノ然ル所以ヲ感ズルニ至ルベシ。唯國內ニ於ケル產業的活動ノ成果即チ其ノ生産物ヲ廣ク國外ニ輸出シテ、所謂經濟的ニ我ガ國民ノ海外發展策ヲ講ゼント欲セバ、(一)貨物ノ生産者・媒介者及國外ニ於ケル需要者間ノ關係ヲ一層密接ナラシメ斷エズ相互ノ聯絡ヲ保タシメンコトニ努メザル可カラザルコト、(二)生産者及媒介者互ニ協力シテ無益ナル競争ヲ避ケ品質ノ統一ヲ計ルト共ニ嚴ニ詐偽的取引ヲ戒ムベキコト、(三)契約事項ノ確守及背信行為ノ根絶ヲ期セザル可カラザルコト、(四)輸出貨物ニ對スル検査ヲ勵行シ壺ニ貨物ノ品質ノミナラズ封裝等ニ關シテモ嚴密ナル監督ヲ爲スベキコト、(五)小規模工業

ニ對シテハ其ノ生産及販賣ニ組合組織ヲ普及セシメ可及の基礎ノ安固ヲ計ル可キコト等ニ特ニ注意ヲ加ヘザル可カラザルハ言ヲ俟タズ、如何ニ其ノ根本ヲ培養スルモ若シ是等ノ諸點ニ於テ從來ノ如クニ缺グル所多カラント、我ガ國民ノ海外ニ於ケル經濟的發展ノ如キハ遂ニ永久其ノ目的ヲ達スルノ機ナカルベシ。

我ガ國ノ如キハ幸ニシテ各種ノ産業的ノ活動ニ缺グ可カラザル勞力ノ豊富ナルモノアリ、加フルニ農工二業ニ於ケル將來ノ發展ノ餘地ノ尙ホ渺ナカラザルコトモ亦既ニ述ベタル所ノ如シトセバ、是等ノ勞力ヲ國內産業ノ更ニ周到ナル開發ニ利用シ、農工業上ニ於テハ勿論商業上ニ於テモ基礎アリ根柢アル健實ナル發展ヲ遂ゲシムルコトハ寧ロ最先ノ急務ト言ハザル可カラズ、此ノ如クシテ國內産業ノ遺憾ナキ開發ヲ成就スルニ至ル時ハ、内ニ在リテハ現在ヨリモ更ニ多クノ人口ヲ支持スルコトヲ得ベク、又外ニ對シテハ所謂經濟的ニ海外發展ノ目的ヲ達スルコトヲ得ベシ、内ニ産業的活動ノ餘地尙ホ乏シカラザルニ拘ハラズ徒ラニ國民ノ移住的發展ノミヲ獎勵シテ、其ノ經濟的發展ノ對内的及對外的ノ諸種ノ關係ニ於テ更ニ之ヨリモ重大ナル意義ヲ有セルモノアルコトヲ忘却スルガ如キハ非ナリ。

我ガ國民ノ經濟的ノ海外發展ノ必要ヲ提唱スルニ當リ最後ニ尙ホ一ノ注意スベキ事項ハ、假令過去ニ於テハ自ラ豊富ナル資本ヲ有セザリシヲ以テ、歐米諸國ノ如クニ有望ナル海外ノ事業ニ資

本ヲ投ジテ所謂放資的ノ發展ヲ爲サントスルモ能ハザル事情アリシト雖ドモ、晩近國內產業ノ勃興及之ニ伴フ資本ノ増加ハ、國外ノ有望ナル事業ニ對シテ資本ヲ放下シ得ベキ餘裕ヲ生ゼシムルニ至レルヲ以テ、將來ノ我が國民ノ經濟的ノ海外發展ハ又此ノ方面ニ特ニ意ヲ用ユルノ必要アルコト是レナリ。第十八世紀ノ末年以後ニ實現セラレタル產業上ノ一大革命ハ英國ヲシテ他國ニ率先シテ世界ニ於ケル工業國タル地位ヲ獲得セシメ、當ニ工業上ノ霸權ヲ掌握セシメタルノミナラズ其ノ生産物ヲ海外各地ニ輸出シテ通商上ニ於テモ亦優越的ノ地位ヲ占メシムルニ至リシガ、其ノ後各國ハ銳意國內產業ノ發達ヲ計リ可及的自給ノ策ヲ講ズルニ至レルヨリ、英國ノ資本家等ハ自ラ貨物ヲ生産シテ之ヲ輸出スルニ代ヘ、餘リアル資本ヲ海外ノ事業ニ投ジテ新タニ放資的ノ發展ヲ試ムルニ至リシガ、此ノ方法ハ却テ效ヲ奏シ嘗テ世界ニ於ケル工業國タリシ英國ハ今ヤ再躍シテ世界ニ於ケル資本國タルノ地位ヲ獲得スルニ至レリ、然ルニ獨・佛・米等ノ諸國モ最初ハ英國ノ資本ヲ利用シテ國內產業ノ開發ヲ計リシガ、漸次國力ノ充實スルニ從ヒ英國ニ倣ヒテ又其ノ餘リアル資本ヲ國外ノ事業ニ放下セントスルノ傾向ヲ生ジ、此ノ如クニシテ遂ニ現今ノ放資的海外發展ノ時代ヲ現出セシムルニ至レリ、東洋及南洋方面ニ對スル我が國ノ經濟的ノ發展モ亦單ニ通商貿易ノ進捗ヲ計ルノミヲ以テ満足スベキニ非ズシテ、更ニ放資的發展ノ程度ニ迄進マシメザル可カラズ、殊ニ我が生産物ノ最大輸出國ノ一タル支那ハ將來或種ノ工業品ニ關シテハ自給的ノ地

位ニ達シ得ベキヲ以テ、我ガ經濟的ノ發展策ヲ單ニ貨物ノ輸出入ノ増加ニノミ求メントスルガ如キハ誤レリ、宜シク一面ニ於テハ通商貿易ノ發展ヲ計ルト共ニ又他面ニ於テハ有望ナル事業ニ對シテハ放資的ノ發展ヲ爲スノ覺悟ナカルベカラズ、同一ノ理由ハ又南洋方面ニ對シテモ之ヲ適用スルコトヲ得ベシ、何トナレバ熱帶植物ノ利用ハ現今ノ文明的生活ニ於テハ一日モ缺ク可カラザル所ノモノニシテ、歐米諸國ノ夙ニ南洋方面ニ着眼セル所以ハ土地其ノモノヨリモ此處ニ成育繁茂セル熱帶植物ノ價值ヲ頗ル重大視シタルニ因ル、而シテ是等ノ有用植物(例ヘバ護謨・椰子・甘蔗・珈琲・麻等)ノ主タル產地ハ地理上ノ關係ヨリ論ズルモ我ガ國民ノ放資的活躍ニ幾多ノ利便ヲ與フルヲ以テナリ。

要之、國民ノ海外發展問題ハ社會的及經濟的ノ二方面ヨリ之ヲ解決セザル可カラザルコトハ固ヨリ論ヲ俟タズト雖ドモ、其ノ孰レニ重キヲ置クベキカハ國內ニ於ケル產業的活動ノ餘地及未開ノ富源ノ有無ニ依リテ決セラルベキ問題ニシテ、我ガ國ノ如キハ寧ロ國民ノ移住的發展ヲ獎勵スルニ先ダチ、内外ニ對スル經濟的發展ノ充實ヲ計ルヲ以テ急務ナリト信ズ。